現代日本語における漢語接頭辞について

曹　佳楽

はじめに

漢字が中国から日本に伝来して以来、音声を表すか意義を表すかを問わず、造語成分として用いられることが多いということには異論がないだろう。しかし、語の構成要素として、捉え方から分類まで、まだ研究する余地は十分ある。

例を挙げると、普通、語を分解して得られる意味を担う最小の単位である形態素の中で、単独で語を構成することができ、語の中核的な意味をになうものを語基と呼ぶ。また、単独で語を構成することができず、形式的な意味を添加するものを接辞と呼ぶ。しかし、現代日本語において、漢語の構成要素である字音形態素は、上の二つの基準によって分類する際、単純に語基か接辞かを判断することはなかなか難しい。

二つの基準を明確にすると、①単独で語になれるかなれないかは、かたち上あるいは使用度数ですぐ判断できる。しかし、②担っている意味は、実質的なものか形式的なものかで分けてみると、結論は必ずしも①と一致するものではない。なぜなら、日本語の五十音や英語のアルファベットなどが音声を表すことと違い、漢字は誕生して以来表音兼表義の文字だからである。例えば、「総選挙」の「総」、「副会長」の「副」、「評論家」の「家」、「家庭用」の「用」など、単独で語を構成することができないが、確実に実質的な意味を持っている。この場合、基準①によっては接辞と判断して良いが、基準②によっては語基とみなすのは適切になってしまうという矛盾が生じる。このような矛盾を含み、漢語接辞を巡って、十九世紀末から、様々な研究が進められてきた。なお、「字音形態素」「語基」「接辞」は、取り上げる文献によって異なる呼び方が用いられる場合、その記述に従うことにする。そのほか、本稿は前置になるものを中心にして論じたいため、接尾辞に関しては取り扱わない部分が多い。

1　先行研究

初めて「漢語接辞」という造語成分に注目したのは、大槻文彦

が『言海』の巻頭に掲載した「語法指南」（一八八二）であり、以下のように記述されている。

漢語ノ「不義」「不本意」「無位」「無慈悲」「第一」「第二」「當年」「當代」「數人」「諸事」「諸書」「衆人」「衆僧」ナドモ、接頭語ナリ

大槻氏は、「語法指南」では、「接辞（affix）」という語を使用していないが、日本語の八品詞以外に、接頭語（prefix）と接尾語（suffix）が存在していると示した。その内、漢語の接頭語に関する記述は、初めて漢語接辞が言語単位として認められたものである。

次に特筆に値するのは、二十世紀前半の漢語接辞の捉え方に関する研究である。一つ目は、松下大三郎の『改選標準日本文法』（一九三〇）で、「原辞[1]」「完辞・不完辞」について論じたもので、図1である。二つ目は、山田孝雄の研究である。山田氏は『日本文法学概論』（一九三六）の第二十六章において、「接辞」の概念[2]を明確にし、さらに接頭辞と接尾辞とをそれぞれ二分類したもので、図2である。また、『国語の中に於ける漢語の研究』（一九四〇）では、修飾部分と被修飾部分の意味的関係について論じた。

図1

[redacted]

図2

[redacted]

二十世紀後半に入ると、国立国語研究所が行った大規模語彙調査が、語彙研究に新たな展開をもたらしてきた。その中で、まず目に付くのは、『講座現代国語学Ⅱことばの体系』における「語構成の特質」（一九五七）で、斎賀秀夫が語構成を論じる際の三つの視点で、①語の結合力、②語結合の形式、③語結合の意味的関係である。この三つの視点に関する記述は、語構成論の中で初めて漢語接辞の特質を明確に論じたものだと言える。その次に、七十年代になってから、野村雅昭の一連の漢語研究が著しい。野村氏の研究は本稿にも大きな影響を与えたが、それについては後述する。その後、統語論の発展とともに、語構成上の造語単位を系統的に捉えるようになった。森岡健二『日本文法体系論』（一

九九四）において、接辞は派生辞に含まれ、「亜熱帯・過保護・急斜面」「運転手・近代的・建築材」など、二字熟語が基になって、語頭又は語尾に漢字形態素を添えるもので、「御」以外の漢語系接辞を、準接頭辞あるいは準接尾辞と呼んでいる。森岡氏は「準接辞」の概念を指摘し、漢語系接辞と和語系接辞との異なる点を明示した。研究対象について、「二字熟語が基になる」ことは、後の研究に大きな影響を及ぼすが、字本位で漢語を考察することを考えれば、ただ形式上便宜的な手段であると筆者は考える。それについては、後ほど詳述する。

以上のように、漢語接辞の研究は、漢語研究の流れに従い、さらに、日本語研究が進めてきた文法論・語彙論・統語論の全体的な発展に従っている。今世紀に入って、生成文法論や認知言語学の研究の他に、体系的な理論研究や個別的な語彙研究についても、山下喜代・田村正男・影山太郎・杉岡洋子・吉村公広などの多数の研究者によって優れた論考が行われている。

2　研究対象

2・1　本稿における「漢語接頭辞」はなにか

本稿は漢語接頭辞を中心にして調査を行うため、漢語接頭辞というのはどのようなものなのか、まず境界を決めなければならない。要するに、ある造語成分は、どのような条件を満たせば「漢語接頭辞」として認められるのか。この疑問を解くことが本稿の第一義である。

前文で述べたように、純粋な接辞は実質的意義を持たないが、それに対して、単独で語にならない字音形態素は、語の中核に付属して複合語を構成する際、実質的意義を語の中核に置くことがよく見られる。このような字音形態素は、意味機能から見ると実質的意義を持つため接辞と言えず、構成層から見ると単独で語として使われないため語基と言えず、今までの研究から見ると、捉え方がかなり難しい。

しかし、漢字が古代中国で誕生してから、表音も表義も生まれつきの機能であり、漢字の音・形・義三位一体の特質は中国語においても日本語においても少しも変わりがない。つまり、字音形態素の意義があるかないかを問うことは無意味な論争でしかない。それに対して、字音形態素がどのような意義を持っているのかが重要で、分類基準になりうるだろう。

そのため、本稿で扱う字音形態素は、日本語において音・形・義が変わらないことを前提にして、常に語の中核に付属し、単独では一語にならないものを、漢語接辞とみなす。その内、前置するものを漢語接頭辞、後置するものを漢語接尾辞と呼ぶ。

2・2　本稿における「漢語接頭辞」はどのように抽出されたのか

先行研究で言及した野村氏・森岡氏をはじめ、最近の個別語彙の研究まで、字数で漢語を分けて研究するものが多い。二字漢語・三字漢語・四字漢語などの分析を通じて、漢語内部の意味的関係を解明するのは、形式上も研究しやすく、結論もわかりやすい。しかし、「二字熟語を基にする」という前提で漢語接辞を抽出す

ることに、筆者は疑問を持っている。要するに、「C（漢語接頭辞）＋AB（二字熟語）」の形を限定した上で、C（漢語接頭辞）を論じると、研究対象が不完全になる場合がある。例えば、「全＋日本」の「全」・「過＋保護」の「過」・「旧＋勢力」の「旧」は漢語接頭辞と見なして良いのに対して、「全＋チーム」や「全＋県」の「全」・「過＋密」の「過」・「旧＋説」の「旧」は漢語接頭辞と言えないことになる。しかしこれは否定されよう。

そのため、本稿では漢語の字数の制限を無くし、筆者の研究[3]に基づいて以下のように条件を絞ってみた。以下の一つの条件さえ満たせば、調査対象として取り扱うことになる。

条件1

漢語接頭辞の非自立性を保つため、結合した語では、語の中核いわゆる語基の部は単独で使用可能であり、漢語接頭辞は音も義も変わらないまま単独で一語としては使えないこと。

例えば、「来　シーズン」の「シーズン」は語の中核であり、「来」は単独で一語としては使えないため、「来」は接頭辞である。「総　当たり」の「当たり」は語の中核であり、「総」は単独で一語としては使えないため、「総」は接頭辞である。それに対して、「県　議会」において「県」は単独で一語としては使えるため、「県」は接頭辞ではない。

条件2

漢語接頭辞と語基は意味構成から見ると、漢語接頭辞は修飾部分であり、語の中核いわゆる語基は被修飾部分である。両者の地位が不平等であること、また、語結合の意味的関係でいうと、並列関係や主述関係ではなく、修飾関係であること。

例えば、「爆　裂」は「爆」と「裂」二つの動詞性字音形態素が爆発して破裂するという並列関係からなる語であるため、「爆裂」の「爆」は接頭辞ではない。また、「爆　鳴」は「爆発音が鳴る」という主述関係からなる語であり、この中の「爆」は接頭辞ではない。それに対して、「爆　笑」は「勢いが爆発しているように激しく笑う様子」という意味で、「笑」は「爆笑」の中核であり、「爆」は「笑」を修飾する。よって「爆笑」（連用修飾）の「爆」は接頭辞と言える。

条件1と条件2は、ある形態素が漢語接頭辞であるかどうかの判断基準であるのに対して、次にあげる条件3と条件4は、むしろある形態素が漢語接頭辞であることの検証基準である。

条件3

漢語接頭辞が単独で使われず、常に語の中核に付属する。その接続機能を最大限にするため、結合した語の字数を問わず、漢語接頭辞は語構成上、最上位の要素であること。

例えば、「各小中学校」は「各＋小学校＋中学校」と分解可能であるが、語構成上、まず「小学校＋中学校」で「小中学校」になり、次に「各＋小中学校」で「各小中学校」になる。「各」は「各小中学校」において最上位の要素である。図3で示す。

図3

[redacted]

条件4

漢語接頭辞の造語力を考慮する上で、結合した語では、後の語基の機能を変化させずに漢語接頭辞は他の形態素に置き換えられること。

例えば、「約　三十人」と「およそ　三十人」、「急　増」と「激増」、「有　期」と「無　期」など。

2・3　漢語接頭辞の分類および本稿の研究方法

漢語形態素の分類について、後の研究に大きな影響をもたらしたのは野村雅昭（一九七八）「接辞性字音語基の性格」である。その研究において、野村氏は、漢語の接頭辞をその品詞性や意味によって以下のように分類し、説明した。

①　体言型…党（～大会）・核（～爆発）・都（～知事）・脳（～細胞）・県（～議会）・女（～生徒）・軍（～首脳）・税（～負担）

この類は、一般の「名詞＋名詞」の構造をもつ複合名詞とおなじ構造を持っているとみることができる。

②　連体修飾型…大（～都市）・中（～学校）・小（～規模）・高（～気圧）・低（～姿勢）・新（～幹線）・古（～美術）・重（～機械）・軽（～金属）・好（～記録）・悪（～天候）・長（～距離）・短（～時間）・名（～選手）・同（～年配）・乱（～気流）・活（～火山）

この類は、和語複合名詞の「形容詞（形容動詞）語幹＋名詞」の構造に擬せられるものである。また、「乱・活」のように、動詞的なものもふくまれ、「追（～起訴）」・「誤（～操作）」のような連用修飾的な結合関係をも構成する。

③　連用修飾型…再（～検討）・最（～年少）・既（～発表）

この類は、副詞訓との対応が考えられるもので、数は少ない。後の部分語基に、動詞・形容詞を従えるのが特徴であり、上に述べた②と合わせて一類とすべきかもしれない。

④　連体詞型…同（～議員）・本（～〇日）・前（～会長）・現（～総裁）・旧（～陸軍）・今（～国会）・来（～シーズン）・故（～〇〇氏）・副（～総理）・準（～決勝）・全（～日本）・総（～選挙）・各（～省庁）・両（～陛下）・諸（～外国）

この類は、種々のものが含まれ、もっとも問題が多い。「本（～会議・～場所・～調子）」の「本」を、②と④のどちらに属するかと言う点で、問題が残る。

⑤　用言型…反（～政府）・超（～党派）・対（～共産圏）・有（～意義）・過（～保護）・要（～注意）

この類は、動詞性の前部分語基と名詞の後部分語基とのあいだに、意味上の格関係が見られるものである。「超（～満員）」・「反（～主流）」などの用法には、②や④と共通する面も見られる。

⑥　否定辞型…無（～意識）・不（～明朗）・未（～発表）・非（～協力的）

この類は、後の部分の語基に否定の意味を与えるとともに、結合形全体の品詞をかえる点に特徴がある。ただし、それぞれの語基の性格には、少しずつ差異がある。

⑦　数量限定型…第（～〇日）・約（～〇分）・満（～〇歳）

この類は、つねに数詞を伴うものである。

⑧　敬意添加型…御（～婚礼）・令（～夫人）

さらに前部分接辞性字音語基[4]の性格を分析した結果、野村氏は次の4類をまとめた。

(1)体言的な語基
(2)修飾語的な語基
(3)連体詞的な語基
(4)品詞決定機能を持つ語基
　ⅰ用言性語基　　ⅱ否定辞性語基（無・不・（未））

本稿では、結合した語の内部関係に注目し、野村氏の分類を再検討したいと思う。日本語における格関係を参照し、結合した語を、格助詞や同義和語などを利用して明確な格関係をもつフレーズに戻し、分類を行う。

分類を行う前に、まず漢語が和語と徹底的に異なる特質を持つことを意識するようにする。表音表義の漢字を利用する中国語は、独立語として語順と虚詞に依存しており、日本語とは異なる。漢語一語は必ずしも一品詞だけを表すのではない。

例えば、「希望（xī wàng）」は名詞でもあり動詞でもある。

他対未来怀抱希望。（名詞：彼は未来に希望を抱いている。）
希望我能再见到他。（動詞：もう一回彼に会うことを望む。）
「健康（jiàn kāng）」は名詞でもあり形容詞でもあり副詞でもある。
健康最重要。（名詞：健康第一。）
健康的身体比什么都重要。（形容詞：健康な身体は何よりだ。）
他健康地成长。（副詞：彼は健康に成長している。／彼はよく成長している。）
「好（hǎo）」は形容詞でもあり副詞でもあり助動詞でもある。
这是个好办法。（形容詞：これはいい方法だ。）
那个人好奇怪。（副詞：あの人はすごく怪しい。）
你早来三十分钟，我好准时下班。（助動詞：私が定時に退勤できるように、30分前もって来て下さい。）

そのため、日本語における漢語の品詞は唯一ではない。本稿では後置する語基の品詞のみに注目するよりも、前にある漢語形態素の品詞を絞ってから分類を行い、さらに接頭辞と見なして良いものの接続機能を探る。取り扱う複合語は野村氏の研究で扱われた語に加えて、『大辞林（第二版）』（一九九五）・『広辞苑（第六

版』（二〇〇八）・『新明解国語辞典（第七版）』（二〇一二）において、「漢語接頭辞＋語基」と見なしているものから抽出した。

分類1

「形容詞（形容動詞）性字音形態素＋語基」

この類は、意味上対称的なペアかグループになるものが多く、その字音形態素は和語形容詞に変えられる。ある意味で、「和語形容詞・形容動詞＋修飾語」からなる「一字漢語＋修飾語」という省略語と言える。本稿では、結合した語を省略からの形容詞訓と見なし、「漢語接頭辞＋語基」として扱わない。

例えば、

大（～都市）＝大きい都市・中（～学校）・小（～規模）
高（～気圧）＝高い気圧・低（～姿勢）
新（～幹線）＝新しい幹線・古（～美術）
重（～機械）＝重たい機械・軽（～金属）
好（～景気）＝よい景気・悪（～天候）
長（～距離）＝長い距離・短（～時間）　など。

そのほか、

怪（～事件）＝怪しい事件
名（～演技）＝有名な演技　など。

分類2

「副詞性接頭辞＋語基」

この類は先行研究からみると、分類が最も複雑であり、副詞訓と認められ接頭辞として認められない研究もあるため、分類する際、中国語の副詞分類を参照し、以下のように7つに小分類した。また、詳しく論じる必要があるものは下線を引き、いくつかを問題にし、後文で述べる。

小分類2・1

「程度を表す接頭辞＋語基」

極（～悪）・過（～飽和）・最（～優先）・準（～社員）・亜（～熱帯）・超（～特急）・半（～熟）・副（～作用）

小分類2・2

「肯定・否定を表す接頭辞＋語基」

非（～公表）・不（～可能）・没（～個性）

小分類2・3

「範疇を表す接頭辞＋語基」

全（～チーム）・総（～動員）・汎（～アメリカ）

小分類2・4

「時間を表す接頭辞＋語基」

再（～開発）・毎（～試合）・未（～完成）・既（～発表）・明（～朝）・旧（～一万円札）

小分類2・5

「方式を表す接頭辞＋語基」

激（～やせ）

小分類２・６
「口調を表す接頭辞＋語基」
約（～三時間）・正（～一合）・満（～〇歳）
第（～一位）

小分類２・７
「場所を表す接頭辞＋語基」
環（～太平洋）

分類３
「名詞性字音形態素＋語基」
この類は前述した判断条件を基にし、意義上、前部と後部が平等かどうかで以下のように２つに小分類した。

小分類３・１
「指示を表す接頭辞＋語基」
該（～人物）・各（～部門）・諸（～形態）・前（～首相）・当（～病院）・本（～稿）・同（～議員）・現（～総裁）

小分類３・２
「一般名詞ａ＋一般名詞ｂ」の類である。
この類はよく「名詞ａノ名詞ｂ」と見られる。結合した語の内部構造から見ると、名詞ａと名詞ｂは意義上平等ではないかと筆者は思う。つまり、名詞ａと名詞ｂのどちらが語の中核と言えるのかなかなか難しい。だから、本稿では、「一般名詞ａ一般名詞ｂ」を「漢語接頭辞＋語基」として取り扱わない。
例えば、党（～大会）・核（～爆発）・都（～知事）・脳（～細胞）・県（～議会）・女（～生徒）・軍（～首脳）・税（～負担）など。

分類４
「動詞性接頭辞＋語基」
この類は格関係を基準にして２二つに小分類した。

小分類４・１
「語基ヲ・ニ接頭辞する」
抗（～ヒスタミン）＋薬・反（～体制）・被（～害）・超（～党派）・対（～共産主義）

小分類４・２
「語基が接頭辞する」
無（～免許）・有（～意義）・要（～注意）
乱（～気流）・故（～〇〇氏）

分類５
「敬意添加接頭辞＋語基」
御（ぎょ）（～意）・御（ご）（～両親）・貴（～社）・令（～夫人）

3　個別語の調査

先行研究と筆者による再分類に注目すると、漢語接頭辞を巡ってまだ研究の余地があるものが二つある。一つは辞書認定の問題で、もう一つは類似関係が見られる複数の漢語接頭辞を比較することである。本稿ではこの二つの問題をめぐって引き続き述べることとする。

3・1　漢語接頭辞の辞書認定

漢語接頭辞の認定については、しばしば二つの問題がある。一つはある字音形態素が副詞訓なのか、もしくは接辞なのかである。もう一つは、ある字音形態素が造語される際、意義用法が多いため、分解した意義項目のみを接辞的用法と認定してよいのか、もしくは派生の視点でその漢語形態素全体を接辞と認定した方がよいのかである。本稿は「約―」と「超―」を抽出して、この二つの問題を述べる。

3・1・1「約―」について

筆者の以前の調査[5]では、各辞書において、「約」は接頭辞として認められていないことが分かった。前置する場合、「おおよそ・だいたい」を表し、多くの辞書では「約」を副詞と見なすが、再調査をした結果、「約」の使用例は以下のようであった。使用例は朝日新聞データベースから抽出したものである。

〈イ〉「約」の後ろに倍数か割合がくる。この場合、後ろにくる数詞は制限なしで、整数や分数やパーセントや端数などがきても構わない。

例：20150202 県警での出動件数は昨年1年間で57件、行方不明者の捜索を目的とした出動件数の割合は約8割に上る。

〈ロ〉「約」にごく普通の数量詞が付く。この場合の数詞はしばしば十進法によって数えやすい数字か端数がない整数、例えば、5・10・20・100。……などがくる。

例：20150103 約100棟の集合住宅が立ち並び、約3万人が暮らす東京都練馬区の光が丘団地。

〈ハ〉「約」の後に、ある数量の範囲の表現が来る。大約の数の上限と下限がある。

例：20150101 〈B型肝炎〉　国内の感染者は約110～140万人。

〈ニ〉「約」の後に時間名詞が来る。

例：20150101 男は約2時間後に体調不良を訴えて、釈放され同市内の病院に入院した。

副詞は文全体か後部に来る語彙かを指すのが普通である。上の例文を見る限り、「約」は副詞であれば文全体を指さず、後部に

来る数量表現を指している。数量表現は体言であり、「約＋数量表現」は連用型ではないため、「約」を日本語において副詞として認定してよいのかどうか、筆者は疑問を持っている。副詞性が強い漢語接頭辞だと言えるかもしれない。

3・1・2「超―」について

「超―」は、専門用語と若者言葉との二つのルートからよく見られる。本稿で取り扱う「超―」を各辞書では、以下のように解釈している。

(1)『日本国語大辞典（第二版）』の記述

① 接頭語的に
名詞に付いて、程度がそれ以上であること、また、それをさらに逸脱するものであることを表わす。「超満員」「超高速」など。

② 副詞的に
俗に、程度が普通以上であるさまを強調していう。「超うれしい」

(2)『広辞苑（第六版）』の記述

① 接頭語的に
程度一杯をさらに超える意を表す。「超満員」
ウルトラ、スーパーなどの訳語。「超関数」

② 俗に
その語の内容をはるかに超えていること。「超忙しい」

(3)『大辞林（第三版）』の記述

接頭語

① 名詞に付く
度が特に極端なものである意を表す。「超満員」「超高層ビル」「超弩級」
あるものから極端に逸脱している意を表す。「超現実主義」「超心理学」

② 動詞・形容詞・形容動詞などに付く
程度がはだしいさまを強調する若者言葉。すごく。とても。「超むかつく」

(4)『三省堂国語辞典（第七版）』の記述

① 造語的に
超越する。「超党派」「超世間的な態度」
基準・限度をこえた。「超高速」「超満員」
ひじょうな。「超急カーブ」「超人気作家」

② 副詞的に
〔俗〕ひじょうに。とびきり。チョー。〔１９８０年代に広まった言い方〕
「超うまい」「超かっこいい」「超釣れた」「超むかつく」

以上の辞書記述によると、「超―」の品詞認定は辞書によって異なっていることが分かった。まとめてみると、「超―」は漢語接頭辞と認定され、以下のように三つに解釈できる。

A. ウルトラ、スーパーなどの訳語。「超関数」
B. 程度がはだしいさま。「超高層ビル」「超満員」「超忙しい」「超むかつく」

C．あるものから極端に逸脱している意を表す。「超現実主義」

ここで意義項目Bを詳しく説明したい。『日本国語大辞典（第二版）』と『大辞林（第三版）』は、名詞に付く「超―」を別項にした。しかし、「超満員・超高層ビル」などの例では、「満・高」のような相言類漢語が必ずあることも無視してはいけない。つまり、「超―」は、「満員」語基全体を修飾するのではなく、「満」の程度をより一層高くするように強調している。同じく、「高層ビル」は語基全体を修飾するのではなく、ビルの「高さ」の程度のはだしさを強調している。このように理解すると、「超満員・超高層ビル」の「超―」は「超忙しい・超むかつく」の「超―」とあまり違いがないのではないか。後に付くものの品詞によって「超―」を分解するより、使用法の派生の視点を導入する方が良いであろう。

3・2　類似する漢語接頭辞について

語と語の間によく類似関係が見られる。漢語接頭辞の語群においても、和語で説明すると同じように見えるものも少なくない。このような類似漢語接頭辞の考察は近年の個別語彙の研究において、徐々に多くなっている。本稿は二組を対象にして、類似漢語接頭辞を考察する際、筆者なりの視点を述べる。

3・2・1「全―」と「総―」について

「全―」と「総―」はよく両方「すべて」と解釈され、現代日本語において他の語と複合する造語力がかなり強い。実際に比較してみると、両語は完全に置き換えられるか、意味は近いが置き換えられないか、別々の意味用法で置き換え不可能か判断しづらい。『日本国語大辞典（第二版）』を調べた結果、「全―」と「総―」は両方とも名詞の上について下にくる語のすべてを含む意を表すことが分かった。また、「全～」は身分や立場を示すある範囲で欠けたところがないことを表す。「総～」は漢語名詞の上についてある集団をおさめることやまとめることを表す。だが、辞書記述よりさらに厳密な相違を探るため、朝日新聞データベースの使用例を調査した。結果は以下である。

接続機能上、「全―」の下に来る語基は、体言類（全島　全タイプ）・用言類（全否定　全壊）・相言類（全盲　全快）・数量表現（全住宅数　全12回）の四種がある。一方、「総―」の下にくる語基は、体言類（総エネルギー　総入れ歯　総支配人）・用言類（総行動　総延長）・数量表現（総入場者数　総事業費）の三種がある。この点から見ると、「全―」は漢語接頭辞として、後に相言が来るため、程度を表す副詞性において「総―」より強い。

意義上では、両語とも下に来る語基のすべてを表すが、語源と関係深いことは分かった。「全―」は、すでに決められた範囲のすべてを表すか、その範囲の割合を強調するか、その範囲にある100％であるかを指す。それに対して、「総―」は各部分を統轄してまとめることで、足し算を表す。

類似関係がある漢語接頭辞を考察する際、用例から出発し、接続機能の調査を通じて、漢語接頭辞の語構成と性格が分かる。さ

らに、意義項目の分解を通じて、新しい語を複合することによって、類似漢語接頭辞の造語差が分かる。この二通りの考察が不可欠である。

3・2・2「本―」と「当―」について

「本―」と「当―」は両方とも時間・空間・人物を表す語基に付く、指示を表す漢語接頭辞である。造語から見ると、重なる語彙はかなり多い。例えば、「本日・当日」、「本校・当校」、「本人・当人」などである。この両語を比べる際、前文の「全―」と「総―」のように語彙中心の調査法のみではなかなか区別がつけられず、文脈分析と指示詞に関する理論の代入をしなければならない。

また、時間・空間を指示する場合、使用例では「当―」は前方指示として使うことが分かった。それに対して、「本―」は話者自身の立場を指示することが多い。人物を指示する場合、特に「本人・当人」の区別がより複雑になる。

『日本国語大辞典（第二版）』によると、「当人」は「その事に直接かかわりのある人。本人。当事者」と解釈され、「本人」は「その事に直接関係を持つ人。当事者。当人」と解釈されている。辞書記述のみを比べるとなかなか区別がつかない。しかし、実際の例文を見ると、やや違うところが見える。以下に例文を示して解説する。

a. ～の意志がもっとも重要だ。

b. 先生～に聞かないと治療法が分からない。

c. あの事件に関わった～同士で話し合う。

例文aは「本人・当人」どちらでも使えるが、意味は少し異なっている。「本人」を使うと、話者を含めてあらゆる人間をさすことが可能であり、「当人」を使うと、話者が外の視点から発話し、話者自身を含めず、その事に関わりのある人を特別にさす。

例文bは「本人」を使う。理由は二つある。一つは、今回の調査では、「名詞＋本人」の用例は見えるが、「名詞＋当人」の用例は見当たらない。これは両語の造語上の性格が異なるからかもしれない。もう一つは、「先生本人」は話者同士しか知らない唯一の存在であり、文脈上唯一無二の話題の人物だからである。

例文cは「当人」を使う。例文bとは異なり、「当人」は事件に関わった複数の立場にいる人たちを指し、唯一指示ではない。

おわりに

本稿では漢語接頭辞に関する研究の流れを簡略にまとめた。語彙研究を中心にした論考を進めるにあたり、自身にとっても学ぶことが多かった。漢語接頭辞の認定と分類については、中国語における字本位から出発し、模索しながら筆者なりの基準を打ち立てた。

本稿に収集した漢語接頭辞だけではまだ不十分であり、今後多くの語を対象として、用例調査を通じた研究を進めたい。また、副詞性が強い漢語接頭辞と指示を表す漢語接頭辞は、類似関係が多数見られるため、各々の相違を明らかにするため、今後の個別語彙調査が不可欠であると思う。これらを筆者の今後の課題として力を入れたい。

注

（1）「原辞」は「形態素」にあたるもの。
松下大三郎『改選標準日本文法』（一九三〇）「原辞は詞の材料であって説話構成上に於ける言語の最低階級に在る」

（2）山田孝雄『日本文法学概論』（一九三六）「接辞は単語の内部に於ける遊離する性質を有する部分にして既に成立せる単語又は語幹に付属して稍複雑なる意義を有する単語を構成するものなり」

（3）曹佳楽（二〇一八）「高程度」を現す漢語接頭辞について（立教大学日本文学大会　口頭発表レジュメ）

（4）本稿では「漢語接頭辞」と呼ぶが、野村氏の研究では「前部分の接辞性語基」と呼ぶ。

（5）曹佳楽（二〇一七）「概算」を表す漢語接頭辞について

参考文献

沖森卓也．２０１１．『図解　日本の語彙』三省堂

久保圭．２０１１．「日本語の否定接頭辞の体系的分類―価値特性と動的特性の組み合わせによる記述―」『日本認知言語学会予稿集』12：123―126

金田一春彦．１９８８．『日本語　新版』（上、下）岩波書店

水野義道．１９８７．「漢語系接辞の機能」『日本語学』６（２）：60―69．

野村雅昭．１９７３ａ．「否定の接頭語『無・不・未・非』の用法」『国立国語研究所論集　ことばの研究』４：31―50．

野村雅昭．１９８８．「二字熟語の構造」『日本語学』７（５）：44―55．

野村雅昭．１９７３ｂ．「複次結合語の構造」『国立国語研究所報告』49：72―93．

野村雅昭．１９７４ａ．「三字熟語の構造」『国立国語研究所報告』51：37―62．

野村雅昭．１９７４ｂ．「四字熟語の構造」『国立国語研究所報告』54：36―80．

野村雅昭．１９７８．「接辞性字音語基の性格」『国立国語研究所報告』61：102―138．

奥野浩子．１９８５．「否定接頭辞『無・不・非』の用法についての考察」『月刊　言語』14（６）：88―93．

サトー　アメリカ・川崎晶子・ソーニア　ロンギ．１９８２．「語頭の位置にある否定的な意味をもつ造語要素『無・不・未・非』の意味と使われ方」『日本語と日本文学』２：１―10．

須山奈保子．１９７４．「接辞『不』『無』をめぐって」『学習院大学国語国文学会誌』17：19―28．

丹保健一・倪永明．２０００．「接頭辞『不（ブ）』『無（ブ）』をめぐって」『三重大学教育学部研究紀要』51：99―107．

山下喜代．２０１３．「接辞性字音形態素の造語機能」『現代日本漢語の研究』東京堂　83―108

田村泰男．２００５．「現代日本語の接頭辞について」『広島大学留学生センター紀要』15：25―36．

吉村あき子．１９９９．『否定極性現象』東京：英宝社

吉村弓子．１９９０．「造語成分『不・無・非』」『日本語学』９（12）：36―44．

【データベース類】

・朝日新聞聞蔵Ⅱビジュアル

（そう　からく　本学大学院博士後期課程）